

詩よ歌よ

女の富岡

多恵子の

発言

1

Tomioka Taeko

声

物語がどこへ

性という情緒

性という情緒

富岡
多恵子の
発言
1

岩波書店

性という情緒

富岡多恵子の発言 1

定価 2400 円(本体 2330 円)

1995 年 1 月 10 日 第 1 刷発行

著者 とみおか た え こ
富岡多恵子

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000

印刷・三秀舎 カバー・半七印刷 製本・松岳社

© Taeko Tomioka 1995

ISBN4-00-003911-3

Printed in Japan

図<日本複写権センター委託出版物>本書の無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写は、日本複写権センター(03-3401-2382)の許諾を得てください。

性という情緒 目次

「文学的」おいたち記 その一

1

I

セックス・カクメイ 9

性という情緒 21

オンナ革命 31

ボーイフレンド道の極意 40

男にとつての結婚 50

みちゆき勝手解釈——心中天の網島

60

II

〈母の訓〉とは何ぞや 89

アイスル・アイシナイ 99

性の非日常性 117

母親からの解放 133

三島由紀夫の結婚——鼎談・上野千鶴子、小倉千加子

149

III

旅のワラジ 169

潑刺と不潔 177

陰あらわるれば褻なりや 180

女の子のすばらしさ 184

男のさみしき女のやさしさ 188

結婚というひとつのカタチ 192

アドレッセンス 195

自分の子、他人の子、人間の子 204

からだの戦後 208

姑の存在——対談・多田道太郎 212

脱強姦へ

219

【インタヴュー】聞き手 黒川 創
やわらかいものをやわらかいままに

221

出典一覧

242

装幀
〃 菊地信義

「文学的」おいたち記 その一

「性」という言葉を口にしたとたん、それは「セクシャリティー」の意味で使っているのですか、それとも「ジェンダー」の意味で使っているのですかと切口上に問いつめられたりするうちに、わたしごとき町人でも、新しい言葉を次々に覚えては、それらをおぼつかぬ手つきであやつるようになってきたが、わたしの十代二十代のころは、幸か不幸か、まだそういうムツカシイ時代ではなかった。

二十五歳になって、わたしはやつと親の家から出た。今でこそ、高校を卒業した時か、少なくとも大を出た二十二歳で出るべきであったと思うが、当時の家の内部の状況からは無理であったのだから愚痴はいうまい。ただし、「やつと親の家から出た」という感覚は今も残る。その「やつと」という感覚には、そのために蹴りとばした足の痛覚も含まれる。蹴りとばしたものは、あくまで私的なものではあるが、それらは全体として前近代的なものに組みこまれている。

「やつと」親の家を出るまで、わたしはチチハハの言葉と闘わねばならなかった。いや、ほんとうに闘わねばならなかったのはそのあとのことで、親の家にいる時は、かれらの言葉と対立しているだけであつた。かれらは明治三十年代半ばに大阪という都市で生れた細民の子であり、義務教育を辛うじて受

けただけで生きてきた。かれらは外国語を学んだこともなければ、日本語の古典のカケラも学んだことはない。かれらは体験によつて出会つて知つた言葉を経験とし、それを生活語にして生きている。外国語からの翻訳で日本語となつた抽象名詞や外来語を使うことなく生きている。ことにハハの方にそれが強いのは、世間の風に直接あたることの少ない家庭内が生活の場だからである。

高校生になると、わたしも「読書」を知り、ひそかな楽しみとなつた。「ひそか」にしているのは、「読書」がチチハハの言葉世界と対立し、かれらがそれに敵意をもっているのを、わたしが察知していたからである。かれら体験主義者の前で、「読書」によつて少しづつ新しい言葉を覚えていくわたしは、「論語読みの論語知らず」にすぎず、それによつて対決すれば一も二もなく惨敗する。幼いながらも、わたしが知りつつある「知的」な楽しさ、よろこびはだれにも打ちあけられぬ、また打ちあけてはならぬ、さみしい孤立であつた。わたしは外国の小説や日本の小説で「恋愛」という言葉とその内容を知つていくが、ハハの知つているのは「恋愛」という言葉ではなく、幼い時から見てきたさまざま芝居や芸能の不義密通や情死であつて、現実のなかでは下世話なホレタハレタであり、男が「女をこしらえる」話であり、世間の娘が「かたづく」話であつた。「学校」や「読書」によつてわたしの得つつある、或いは得たばかりの「知的」な言葉や知識は、ハハの生活者としての体験の言葉と、主として文字によらぬ芸能からつくられた教養(?)によつて、あつてなくねじ伏せられる。それはほとんど、十代のわたしには凌辱のような感覚として受けとめられていた。

一方で、わたしはハハのする彼女の「物語」にも攻めこまれていた。ほとんどチチ不在の家のなかで、

ハハの神経症は「物語」となつて集中的に娘にぶちまけられた。チチとハハの物語、ハハのチチへの怨みと批判は、ちようど説経節のように同じ文句でくり返された。娘は時にチチを怒り、時にハハを怒り、時にはハハの「物語」に同情するが、結局はウンザリして、「物語」を忘れようとする。しかし、ハハの「語り口」は耳の底から消えていかない。それはハハの「物語」の文体に他ならないのだった。

ハハは、彼女自身が「物語」であると同時に、その「物語」の語り手でもあつた。わたしはそれらしんからウンザリしていたが、のがれる術がなく、ハハの「物語」への嫌悪と同情の混乱がわたしを沈みこませ、言葉を自閉させ、ビョーキを自覚させた。ただしその時、高校生に自己治療の方法はなく、現実のハハから遠ざかり、脱出することなど思いもよらなかつた。ただ漠然と、ヒト気の少ない空間を夢想し、将来は辺鄙なところに独居しようと計画した。そのためには山深いイナカの学校の教師になるのが最良の方法だと、ひそかに思いめぐらせるくらいが関の山であつた。そのころいちばんの希求は、ハハのごとき「物語」ではないなにかを腹いっぱいになるほどに読みたいということだけだつた。いわば、それが発情だつた。まわりには、その指南役はいなかつた。友人にもいなかつた。家のなかには書物の類はいっさいなかつた。

高校生になるころには、国がイクサに敗けてからすでに五年たち、戦後のどさくさは一段落ついていた。夕食後のラジオで落語を、漫才を、講談を、浪曲をハハは聴き、娘もそれをいっしょに聴いた。そこで、娘はハハのそれら芸能に対する解説、辛口の寸評も聴くことになつた。民謡、俗曲、歌謡曲の類も聴き、昔の歌で思い出すものを教えてくれることもあつた。落語のマクラに出てくるようなドドイツ

の気のきいた文句なども、よく知っていて教えてくれたが、娘はすぐに忘れてしまった。今となれば惜しい気もするが、そのころの娘の関心はアメリカから輸入されてくるポピュラ・ソングだったのだから如何ともしがたい。娘は英語の歌詞を覚えるのに熱心だった。

チチとハハとの戦争はひどくなる一方だったが、芝居が変わるたびにハハが劇場へ出かけていたのは、ハハの身内が劇場で働いていたからである。わたしはたいはいハハに同行していた。ここでもハハの批評は知らず知らず耳に入っていた。その劇場にかかる芝居は、歌舞伎、文楽、新派、新国劇だった。歌舞伎では、寿海、寿三郎、三津五郎がなぜか記憶に残っている。浄瑠璃では、山城少掾をハハがキチンとしすぎるといってあまり好まなかったので逆によく覚えてる。新派は、花柳、水谷、大矢、石井などにかかるかけ声が、歌舞伎のようにナニニ屋でなく、ハナヤギツ、ミズタニツ、オオヤツ、のようだったのを覚えてる。水谷のややかすれ気味の声も。

家の外にいるチチとの接触は、ハハとのそれと比べくもないほど少なく限られていた。高校生のころのチチはまさに「高度成長期」に入って、成金になりつつあった。それは、半分は時代のせいであり、半分は彼の才能であったが、その才能は近代資本主義の経営に有効なものではなかった。彼は一時期、しこたま儲け、思う存分に儲けたものを蕩尽し、孤独にみすばらしく病死した。彼は商人というより、バクチ打ちという方がふさわしく思える。このひとが「文学」という言葉を知っていたかどうか。多分知らなかったと思うが、ハハのもつ口誦文芸や芸能の世界が中世的というなら、このひとのもつ、いわば「前近代」的な魅力というものは、旧式な意味あいですれ自体が「文学的」だったということになる。

だろう。しかし、わたしはそういう「文学的」なものからは離れたかった。わたしはハハを殺し、返すヤイバでチチも殺さねばならないのである。といつても、そのころ、そのための知恵も戦略もなく、ただ、鬱陶しい現実という暴力に耐えているしかない小娘にとつて、「読書」の世界とチチハハという現実との距離を計量する集中力が時には病的に突出していった。「読書」によつてのぞき見る、向うのひるがりでありそうな世界、詩や小説にたれさがる重い袋のような世界、そういうところに自分の好奇心がつんのめつていくのをオクビにも出さず、たんにちよつと「ワガママな女の子」であらねばならぬ。学校にある、文芸部、文学研究会、同人雑誌の集り、読書サークルのごときは、そのころのわたしにはもつとも恥しい、ちゃんちゃらおかしいものであつた。重い袋のような世界の奥へは、とうてい十六や十七のガキが素手で、遊び半分に入つていけるものではないとの思いがあつた。うかうかと、自分の好奇心を素直にオモテに出すと、チチハハの住む世界の住人や言葉に、わたしは嘲笑され、愚弄され、あげくに強姦されるとの直感によつてひそかに身構えるのである。もちろん、こういう心情や身構えを打ちあけうる同年輩の友人などあるはずはない。そのころのチチは、おもしろいように入つてくる金を使う楽しさを見せるつもりなのか、味わわせるつもりなのか、墮ちゆく道づれにするつもりかはいざ知らず、娘を呼び出し、まるで愛人にするようにハクライ品を買い与え、分不相応な美食をさせて、日常からひと時つりあげてはドスンと無造作に落す。落される日常は、ハハの不安神経症がひきおこす愚痴、嫉妬、男子専制への怨嗟の声、屈辱の泣き声がくり返される場所である。同質の湿気でありながら、チチとハハの世界は景色があまりにちがひ、その間で、いわば強要される「通辞」の役割は、娘にはやは

り軽いものではない。そこでは「学校」や「読書」で仕入れた言葉が役に立つてくれないのだ。

わたしのチチハハのような、「生」に無頓着な男女も、発情と「家族」という物語のせいで子を産み、わたしをこの世に送り出したのであろう。もつとも、かれらもかれらの親から同様にこの世に送り出されたのだろうが、かれらには、産んだ子はかなり長い間「所有物」としてあり、子が「苦しむ生きもの」であるとの認識などない。それは本人にその認識がないからである。わたしは時に、「親の心、子知らず」というけれど、それは逆であつて「子の心、親知らず」だと思ひ、かれらが、いっぱしの動物として子を産み、家族らしきものを形成し、しかもそれさえうまくできないことを滑稽に感じていた。

もちろん、わたしは一方でかれらが役割上のチチとハハとして、また男と女として、「イスカの嘴」のように、ことごとくいちがつていくその源が、かれらの育ちや社会規範、社会制度にもあることは想像し、そこに同情もしていた。にもかかわらず、かれらに「ヒトの繁殖」を感じ、まだ十六、七の小娘の分際で「ヒトの繁殖」からははずれようと、かなり強く決心していた。おそらく、わたしはかれらが見せる苦しみの片棒をかつぐことがつらいのではなく、その景色のディテールに敏感であることによつて、チチハハの私的な景色というよりヒトの景色をそこに感じたからであつた。そのおかげで球技や登山やスキーのような、かれらのニオイのしない場所へのがれて、悪い遊びはなにもしない、凡庸な高校生として「明るい高校生活」を過すことになつた。

I

セックス・カクメイ

1971

去年の夏、わたしは三日間ロスアンジェルズにいた。そこでわたしは、以前に東京で同じアパートの隣人であった友人に会ったが、その友人は会ったとたん、あのケイトが今アメリカですごく有名なんだよ、知っているかい、とわたしにいった。本がベストセラーになり、その本は売り切れてまだ買えない、とその友人はいった。わたしは数年前、そのケイトが日本にいた時借りて住んでいた家を、偶然に彼女のあと借りたことがあり、またニューヨークでは彼女はわたしの、親切でコワイ英語の先生だった。わたしはケイト・ミレットのそのベストセラーの本が、『性の政治学』というタイトルであると教えられ、驚くどころか、さもありませんという気持がした。

わたしはその三日間のロスアンジェルズで、これまた偶然に、ヘンリー・ミラー氏に会った。先の友人がミラー氏の近所に住んでいて、かれらがその時ちようど夕食によばれていたからつれられていったのである。わたしはヘンリー・ミラーの本は読んだことはない。ところがミラーをたずねてくるのはたいてい本のファンかミラーのファンであるから、わたしはちよつとバツが悪くて、世間話しかできない。ミラー氏は文学の話やプライベートな話もしてくれたが、こういうこともいった——女というのは家の

中で料理をしたり、裁縫したり、子供の世話をしたりするのがいいんだ。まったくその通りです、とわたしはいった。ああ、あのケイトさんがきいたらなんというだろう。わたしはその『性の政治学』という本を読んでいるが、その中でケイトはミラーをたくさん引用しているそうである。またその『性の政治学』という本は、彼女の博士論文かなにかのために書かれたたいへんマジメなものであるときくが、わたしのようなヨタな人間はマジメとつきあうのは覚悟がいる。

アメリカには、(男を切り裂くための会)というものすごい名称の女のひとのグループがあり、性の革命は男性の性を破壊する他ない、これからは女は女性だけを産むことをしなければならぬ、という宣言をかかげているそうである。また或るグループは、女がコドモを産むことをやめるしか性の革命は達成できない、というのもあるらしい。また或る女性解放運動の軍医総監は、胎児を子宮外で成長させる方法を一刻も早く完成させるために集中研究をする必要がある、といっているそうである。

アメリカも、そしてこのニッポンも、今や文明の世の中である。その文明の社会は、情報による管理がいきとどいた社会である。科学の力をかりて、人間のわからぬことをスミズミまでわかろうとし、そのわかったことがらを社会のスミズミまで伝え得ると信じられている社会である。つまり、この社会には光のあたらぬ暗闇はなく、語れぬものはなく、努力次第、研究次第、管理次第ですべてのことがらはつきりさせ、ケリがつけられるということである。

ところが、われわれヒトは、どうやらそうは簡単にうまくいかぬことをとつくに勘づいている。われわれのコトバという記号でさえ語れぬもの、沈黙したままでヒトをよせつけぬもの、ひよつとしたら、